

ムンダ語族比較言語学研究序論

長 田 俊 樹

0. はじめに

筆者は将来、ムンダ語語源辞典を作る計画である。そのことは七年前の論文（長田1990）ですでに述べた。ムンダ語語源辞典はたんなるムンダ諸語の語彙の羅列ではない。そこには比較言語学による研究のうらうちが必要である。ところが、ムンダ語族の比較言語学研究について、日本語で書かれたものはほとんどない。⁽¹⁾ また、世界的にいっても、ドイツのベルリン自由大学のピノウ教授の一連の研究（Pinnow 1959, 1960, 1963, 1965b, 1966）とシカゴ大学のザイデ教授による研究（N. Zide 1965, 1966, 1978, 1985, 1991）と紹介（Zide 1969, Diffloth and Zide 1992）、およびインドにおける故バッタチャルヤ教授を中心とした研究（Bhattacharya 1966, 1968b, 1975a, 1975b, Mahapatra 1980）と、指折って数えられるほどしかない。そこで、ムンダ語語源辞典の第一歩として、小論はこれまでのムンダ語族の比較言語学研究を概観する。

ムンダ語族の研究はそれ自体、非常に少ない。しかし、かつて盛んな時期があった。それは1960年代のことである。シカゴ大学によるムンダ諸語プロジェクトが原動力となっていた。ちょうど、ピノウ教授の一連の論文が発表されたのも同じ時期である。また、インドのバッタチャルヤ教授もこのプロジェクトに参加し、アメリカとインドの研究者が共同でこのプロジェクトを推進してきた。ところが、アメリカ政府とインド政府の関係が悪くなると、このプロジェクトは自然消滅した形となった。プロジェクトの消滅とともに、ムンダ諸語の研究者は減っていった。このプロジェクトのもと、若手の言語学者が博士論文を書いている。たとえば、Matson (1964)、Fernandaz (1968) など。しかし、かれらもいまは、ムンダ諸語の研究から遠ざかってしまった。⁽²⁾ プロジェクトの中心的役割を果たしたザイデ教授だけが、現在もまだ、ムンダ語族を専門として研究を続けている。そのザイデ教授もついに定年をむかえた。それがムンダ語族研究の現状である。小論はこうしたムンダ語族研究の現状をふまえたうえで、Pinnow (1959) 以後の研究動向を中心に論じる。

ところで、ムンダ諸語はモン・クメール諸語とオーストロアジア語族を形成する。いや、もっと厳密に言えば、オーストロアジア語族を形成すると考えられている。この説はシュミット神父が今世紀のはじめに、提案したものである（Schmidt 1906）。ピノウ教授の一連の研究によって、その仮説が証明されたかのように考えられてきた。そして、1973年には、第一回オーストロアジア言語学会がハワイ大学で、また1978年には第二回学会がインドのマイソ

ールで開催されるにいたった。ところが、その後は立ち消えになってしまい、第三回はいまだに開催されていない。その背景には、モン・クメール諸語の研究者がオーストロアジア語族に懐疑的であるからだという。⁽³⁾さらに、シュミット神父はオーストロアジア語族とともに、さらにオーストロアジア語族とオーストロネシア語族との系統関係を提唱した (Schmidt 1906)。これをオーストリック (大) 語族と呼ぶ。最近、この大語族を支持する動きがある。日本の土田滋教授 (土田1989) やハワイ大学のリード教授 (Reid 1994, 1996) などのオーストロネシア語族の研究者たちである。⁽⁴⁾一方では、オーストロアジア語族に懐疑的な研究者がいる。他方では、オーストリック大語族を支持する動きがある。まことに、奇妙な現象である。その原因として、つぎの二点があげられる。ムンダ諸語やモン・クメール諸語の正確な記述がすくないこと。そして、それにもとづく比較言語学的研究がなされていないこと。そのために、こうした奇妙な現象を生むのではなかろうか。オーストロネシア語族については、最近オーストロネシア比較言語学辞典が出版された (Tryon ed. 1994)。これに匹敵するとまでいえないまでも、オーストロアジア語族の比較言語学研究がある程度の水準に達しない限り、オーストリック大語族の厳密なる検証はむずかしい。また、オーストロアジア語族自体が万人から支持されるためには、なによりも、ムンダ諸語やモン・クメール諸語の比較研究の充実が急務である。小論はそうしたことを考慮し、ムンダ語族比較言語学的研究の出発点となることを目標とする。

なお、1990年代に入り、ロンドン大学のパーカー博士がオーストロアジア語族を紹介した本を出版した (Parker 1991)。パーカー博士はムンダの親族構造研究を専門とする人類学者である。しかし、フィールドはやらなかったという (Parker 1992: iv)。たぶん、言語学の無知からくるのであろう。驚くべきことに、オーストロアジア語族を言語学的に確立させた Pinnow (1959) への言及がない。Pinnow (1963-1966) への言及があるものの、名前を Hans Jürgen (Heinz-Jürgen) とまちがっている (p. 147)。また、ムンダ語 Tamar 方言の話者と社会的な範疇である Mahali Munda を同一視している (p. 18)。さらに、シカゴ大学のグループがサンタル語に注目していないと指摘しているが (p. 17)、Zide (1968, 1972) はサンタル語についての論文である。ざっと目を通してただけでも、誤りが目につく。こうした誤りにくわえて、フィールドをやらなかったせいも、地理感覚がない。そのため、巻末の地図には多くの間違いがみつかるといえる。⁽⁵⁾この本については、とくにモン・クメールの章に関して、Bauer (1993) がすでに批判している。⁽⁶⁾ムンダについても、かなり問題がある。裏を返せば、出版する以前に、こうした誤りをだれも指摘しない、あるいはできない、オーストロアジア研究者の層の薄さを物語っているといえるのではなかろうか。

小論はつぎの構成からなる。まず、ムンダ諸語の分布や話者人口などを第1章でみる。そのさい、言語名などの統一をはかる。第2章、第3章では音韻論と形態論、統語論、語彙論について論じる。そして、それぞれについて、何がこれまであきらかになり、なにがまだあきらかでないのかについてみておきたい。ムンダ諸語とオーストロアジア語族の関係については第4章で述べる。

1. ムンダ語族

ムンダ語族は系統関係があきらかな一群の言語の総称である。ムンダ諸語ともいう。分布はインド亜大陸中央部から、東部にかけて広がる。ムンダ語族は、大きく南ムンダ語派と北ムンダ語派に分けられる。さらに、南ムンダ語派は中央ムンダ諸語とコラプート諸語に分けられる。一方、北ムンダ語派はコルク語とケルワリアン諸語とに分けられる。それぞれのグループにはつぎの言語が所属する。なお、この一覧表はシカゴ大学のムンダプロジェクトによる分類にしたがった。⁽⁷⁾

ムンダ語族 (Munda language family)

北ムンダ語派 (North Munda)

ケルワリアン諸語 (Kherwarian)

ムンダ語—ホー語グループ (Mundari-Ho)

- (1) ムンダ語 (Mundari)
- (2) ホー語 (Ho)
- (3) コルワ語 (Korwa)
- (4) アスル語 (Asuri)
- (5) ビルホル語 (Birhor)
- (6) ブミジュ語 (Bhumij)

サントアル語グループ

- (7) サントアル語 (Santali)
- (8) トゥリ語 (Turi)

コルク語グループ

- (9) コルク語 (Korku)

南ムンダ語派 (South Munda)

中央ムンダ諸語 (Central Munda)

- (10) ジュアン語 (Juang)
- (11) カリア語 (Kharia)

コラプート諸語 (Koraput Munda)

グトブ語—レモ語—グタ語グループ (Gutob-Remo-Gta?)

- (12) グトブ語 (Gutob)
- (13) レモ語 (Remo)
- (14) グタ語 (Gta?)

ソーラー語—ジュライ語—ゴルム語グループ (Sora-Juray-Gorum)

- (15) ソーラー語 (Sora)
- (16) ジュライ語 (Juray)
- (17) ゴルム語 (Gorum)

それぞれの言語について、分布と話者人口、それとこれまでの研究について、かんたんにみておこう。

(1) ムンダ語。英語では Mundari といい、ムンダ語族を表わす Munda と区別している。また、『言語学大辞典』では、ムンダーリー語と呼んでいる。しかし、筆者は個別言語をムンダ語、系統関係があきらかな言語グループはムンダ諸語、あるいはムンダ語族として区別する。分布はビハール州ラーンチー県を中心に、オリッサ州の北部、西部、および西ベンガル州西部に広がる。話者人口は1981年センサスによると、752,683である。しかし、同じセンサスに Munda として、348,839あげてあるが、これも同じムンダ語である。したがって、話者人口は100万人を越す。ホフマンによる文法書と百科事典 (Hoffmann 1903, 1929-78) をはじめ、シカゴ大学のプロジェクトのもとのランゲンドンやムンダの論文 (Langendoen 1967a, 1967b, Munda 1969)、クックの博士論文 (Cook 1965) など、ムンダ諸語のなかでは、記述研究は比較的多い。筆者もムンダ語の記述をおこなっている (Osada 1992)。

(2) ホー語。分布はビハール州西シンブーム県を中心に、オリッサ州北部にも広がる。話者人口は648,066 (1961) である。カソリック神父のディニーによる文法書と辞書がある (Deeney 1975, 1978)。

(3) コルワ語。分布はビハール州バラーム県を中心に、マディヤプラデシュ州スルグジャール県に広がる。話者人口は17,720 (1961) である。シカゴ大学プロジェクトによる語彙表 (Bahl 1962) と音韻論をあつかった Barker (N. D.) がある。

(4) アスル語。ビハール州グムラー県のネタラハート丘陵に分布する。話者人口は少なく4,540 (1961) である。記述研究は Hahn (1900) しかなく、その記述は正確とはいえない。最近、インド中央言語研究所による調査がおこなわれたと聞く。しかし、その成果についてはまだ出版されていないようだ。

(5) ビルホル語。ビハール州ハザリーバーク県のチャトラ郡を中心に点在する。話者人口はきわめて少なく590 (1961) である。Roy (1925) の巻末の語彙表と筆者自身の調査報告 (Osada 1993) があるが、いずれも、語彙をまとめただけである。

(6) プミジュ語。ビハール州東シンブーム県から、西ベンガル州プルリヤー県にかけて分布する。話者人口は131,258 (1961) である。最近、インド中央言語研究所から、Ramaswami (1992) がでたが、筆者未見。

(7) サンタル語。ビハール州旧サンタルパルガナ県を中心とし、オリッサ州マユールバンジ県や西ベンガル州のミドナープル県などに多く、移住によって、ネパール、ブータン、バングラデシュにも広がっている。話者人口は400万人を越える。ふるくから、多くの研究があるが、Bodding (1925-40, 1929-36, 1929-30) をこえるものはない。最近、Ghosh (1994) と Suryakumari (1991) による博士論文がある。また、Minegishi (1990) はサンタル語シンブーム方言の語彙をまとめている。ムンダ諸語のなかでは、ムンダ語とともに、比較的記述研究が多い。⁽⁸⁾

(8) トゥリ語。トゥリとはカーストの名をさす。トゥリカーストに属する人の多くはインド・アリア諸語を話す。そのうち、どれぐらいがムンダ語族に属するトゥリ語を話すか、

データはない。トウリ語を直接調査したことがあるボネット神父によると、おもに、ビハール州ロハルダガー県から、マディヤプラデシュ州スルグジャー県にかけて分布するという。このボネット神父の調査語彙を筆者がまとめたが (Osada 1991a)、それ以外には最近の研究はない。

(9) コルク語。ケルワリアン諸語とはかけ離れ、マディヤプラデシュ州から、マハーラーシュトラ州にかけて分布する。話者人口は208,165 (1961) である。音韻論をおもにあつかった N. Zide (1960, 1979) と、Girard (N. D.) による辞書がある。その他では、Nagaraja (1985, 1991-92, 1993) が一連の研究を発表している。

(10) ジュアン語。分布はオリッサ州デンカーナル県を中心に広がる。話者人口は15,795 (1961) である。博士論文として、Matson (1964) がある。それ以外では、B. Mahapatra (1976) や Dasgupta (1978) の論文があるぐらいで、最近の研究はほとんどない。

(11) カリア語。ビハール州グムラー県を中心に広がる。話者人口は比較的多く、171,269 (1961) である。博士論文として、Biligiri (1965a) と Malhotra (1982) があるが、後者は出版されていない。また、テキストとして、Pinnow (1965a) がある。

(12) グトブ語。ガダバ語 (Gadaba, Gadba) ともいう。オリッサ州コラプート県を中心に分布する。話者人口は40,193 (1961) である。N. Zide (1965) や DeArmond (1976) など、比較言語学研究の対象として言及されているが、記述研究はおおやけにされていない。

(13) レモ語。ボンダ語 (Bonda)、ボンド語 (Bondo) ともいう。オリッサ州コラプート県に分布する。話者人口は4,677 (1961) である。博士論文として Fernandez (1965) があり、このうちの動詞形態論だけをまとめた Fernandez (1983) がある。また、辞書として、Bhattacharya (1968a) があり、この辞書の書評は指示詞体系など、形態論をまとめている (N. Zide 1972b)。

(14) グタ語。ガタ語 (Gata?)、ゲタ語 (Geta?) ともいい、ディデイ語 (Didayi, Didei, Dire) ともいう。オリッサ州コラプート県に広がる。話者人口は少なく、1,978 (1961) である。形態論をあつかった論文として、N. Zide & K. Mahapatra (1972), K. Mahapatra (1976), N. Zide (1976) がある。また、Panda (1989) にはディデイ語—英語—オリヤー語の語彙集がある。

(15) ソーラー語。サオラ語 (Saora)、サヴァラ語 (Savara) ともいう。オリッサ州コラプート県から、アンドラプラデシュ州シュリナクラム県にかけて広がる。南ムンダ語派のなかでは話者人口は多く、265,726 (1961) である。ラマムルティによる文法書と辞書 (Ramamurti 1931, 1933, 1938) 以外に、シカゴ大学のプロジェクトのもと、スタロスタによる博士論文と一連の論文 (Starosta 1967, 1973, 1976, 1981) や Biligiri (1965b) などの研究がある。

(16) ジュライ語。ジュライ語はソーラー語の方言と考えられてきたが、シカゴ大学のグループが個別言語と認定し、現在にいたる。A. Zide (1983) によると、オリッサ州ガンジャム県を中心に分布し、話者人口は6—7千人という。A. Zide (1982) の博士論文をはじめ、N. Zide (1985), A. Zide & N. Zide (1987) など、比較言語学の研究対象として言及されているが、記述研究は手にはいるかたちではない。

(17) ゴルム語。パレンギ語 (Parengi) ともいう。オリッサ州コラプート県に分布する。話者人口はきわめて少なく、767 (1961) である。Bhattacharya (1958) をはじめ、アーリン・ザイデが修士論文で音韻論を展開し、動詞についても論文がある (A. Zide 1963, 1972)。また、Aze (1973) が統語論を扱い、Aze & Aze (1973) がテキストをまとめている。

以上、シカゴ大学のムンダプロジェクトの分類にそったかたちで紹介した。ここにあげた言語以外にも、最近出版された International Encyclopedia of Linguistics には、Munda languages として、Koda, Karmali, Mahali, Agariya, Bijori, Koraku (以上、ケルワリアン諸語) などの言語名があげられている。しかし、これらについての記述は Linguistic Survey of India の不完全なものしかない。また、社会集団の名前と言語名が混同されているケースも十分考えられる。さらに、この「ムンダ諸語」の項目の執筆者があきらかではない。しかも、センサスを使わないで、人口統計の出典があきらかにされないまま、話者人口をおおざっぱに記載しているなど、疑問点が多い。そこで、こうした言語についてはここではとりあげない。

ところで、シカゴ大学のプロジェクトの最大の関心事はムンダ語族の比較言語学研究である。とりわけ、それまでデータが不足していた南ムンダ語派の分類や音韻対応に集中している。たとえば、カリア語とジュアン語を南ムンダ語派とみるか、北ムンダ語派とみるかについて、N. Zide & Stampe (1968) が南ムンダ語派に属することを結論づけている。また、ソーラー-ジュライ-ゴルム祖語について、Stampe (1963) をはじめ、A. Zide (1982) や A. Zide & N. Zide (1987) が論じ、グトブ-レモ-グタ祖語については、N. Zide (1965) や DeArmond (1976) があつかっている。第2章、第3章ではこうした論文を中心に述べる。しかし、南ムンダ語派の充実にくらべ、ムンダ祖語レベルでの音韻対応を論じたものは Pinnow (1959) だけである。シカゴ大学のプロジェクトの総括として、ムンダ語族の全体像をあきらかにする書物がもうそろそろ出版されてもよいのではなかろうか。一日もはやい出版を望んでやまない。

なお、うえにあげた分類以外にも、Bhattacharya (1975b) が新しい分類を提示している。この新しい分類は音韻対応よりも、類型論的特徴にもとづく。シカゴ大学のおこなってきた音韻対応による分類と、Bhattacharya によるかなりアトランダムな類型論的特徴による分類と、どちらの方が十分に説得力をもつか、議論を必要とする。ただし、シカゴ大学グループはこの類型論的特徴による分類をまったく無視しているようにみえる。しかし、類型論的特徴⁽¹⁰⁾を考慮したうえで、ムンダ語族の分類を見直すことも、将来的には検討せねばなるまい。

2. 比較音韻論

まず、母音からみていこう。それぞれの言語の母音体系はつぎのとおりである。

- (1) ムンダ語。/i, e, a, o, u/ (Gumperz 1957, Cook 1965, Osada 1992)
- (2) ホー語。/i, e, a, o, u/ (Deeney 1975)
- (3) コルワ語。/i, ī, e, a, ā, o, u, ū/ (Bahl 1962)、/i, e, a, ə, o, u/ (Barker N. D.)
- (4) アスル語。筆者の知る限りでは母音体系の記述はない。

- (5) ビルホル語。/i, e, a, o, u/ (Osada 1993)
- (6) プミジュ語。筆者の手元には母音体系を記述した資料がない。
- (7) サントル語。/i, e, ε, a, ə, ɔ, o, u/ (Sebeok 1943); シンブーム方言/i, e, a, ə, o, u/ (Minegishi 1990).
- (8) トゥリ語。/i, e, a, o, u/ (Osada 1991a)
- (9) コルク語。/i, e, a, o, u/ (N. Zide 1966)
- (10) ジュアン語。/i, e, a, o, u/ (Matson 1964)
- (11) カリア語。/i, e, a, o, u/ (Biligiri 1965a, Malhotra 1982)
- (12) グトブ語。/i, e, a, o, u/ (N. Zide 1965, DeArmond 1976)
- (13) レモ語。/i, e, a, ə, o, u/ (Fernandez 1968, Mahaptra 1980), /i, e, a, o, u/ (N. Zide 1965, DeArmond 1976)
- (14) グタ語。/i, e, ε, a, o, u/ (DeArmond 1976, Mahaptra 1980)
- (15) ソーラー語。/i, e, ε, i, ə, a, o, ɔ, u/ (Stampe 1963)
- (16) ジュライ語。A. Zide (1982) の記述があるが、現在筆者の手元にない。
- (17) ゴルム語。/i, e, a, o, u/ (A. Zide 1963)

まず、ケルワリアン祖語の母音体系をみておこう。ケルワリアン諸語は(1)―(8)である。このうち、ノーマン・ザイデによると、コルク語の長母音/i, ā, ū,/は疑問であるという。また、ペイカーの記述する/ə/も疑問である。サントル語の/ə/はサントル語独自の発達である。ケルワリアン諸語のなかで、サントル語だけが広い/ε, ɔ/と狭い/e, o/の対立をもつ。

ケルワリアン諸語のうち、よく記述されているサントル語とムンダ語をとりあげて、母音の対応をみてみよう。その母音の対応を表1で示した。また、表1にはそれぞれの対応に、Pinnow (1959), Zide & Munda (1966) および Munda (1968) と Osada (1996) がたてた祖形もあげた。つまり、筆者以外はそれぞれの音韻対応に対して、別の音素をたてている。しかし、サントル語/e/にムンダ語/i/, およびサントル語/o/にムンダ語/u/が対応する語例をくわしく検討すると、母音のあらわれる環境に制限があることがわかる。そこで、筆者はある環境のもとでサントル語/e, o/がケルワリアン祖語/*i, *u/から音韻変化したものと推測した(長田1984)。その後、筆者の仮説を証明する例として、サントル語シンブーム方言が報告された(Minegishi 1990)。シンブーム方言には広い/ε, ɔ/と狭い/e, o/の対立がない。まさに、筆者のたてたケルワリアン祖語と同じ母音体系がシンブーム方言で報告されたのである。このことから、筆者自身はケルワリアン祖語の母音体系は/i, e, a, o, u/の5母音であると結論づけている(Osada 1996)。

表1 (Osada 1996: 246頁から転載)

Santali	i	e	e.ε	ə	a	o.ɔ	o	u
Mundari	i	i	e	a	a	o	u	u
Pinnow	*i	*e	*ε		*a	*ɔ	*o	*u
Zide & Munda	*i	*i	*e		*a	*o	*u	*u
Osada	*i		*e		*a		*o	*u

つぎに、北ムンダ祖語についてはどうであろうか。北ムンダ語派はうえのケルワリアン諸語と(9)コルク語からなる。N. Zide (1966: 225)によると、北ムンダ祖語の母音体系を/i, i, e, ε, a, ə, ɔ, o, u/と9母音たてている。しかし、Zide (1966: 222, 224)があげる対応表に、サンタル語のシンブーム方言を照らし合わせると、これほど母音をたてる必要があるのかという疑問がわく。もう一つ大きな問題は、Zide (1960, 1966, 1976)が報告する低声調 (low tone) による対立が果たしてコルク語にあるのか、という点である。ザイデ教授は残念ながら、いずれの論文でも最小対立のかたちで語例をあげていない。また、Nagaraja (1985)はまったく声調にはふれていない。この声調と北ムンダ祖語の母音体系とは密接な関連があるので、もう一度記述研究から、見直す必要があろう。

一方、南ムンダ諸語については筆者自身、調査をしたことはない。また、資料もおおやけに刊行されたものが少ない。したがって、南ムンダ祖語の母音体系についてはこれまでの研究を紹介するにとどめる。南ムンダ諸語のうち、ソーラー = ゴルム祖語の母音体系は/i, i, e, ε, a, ə, o, ɔ, u/ (Stampe 1963: 33)の9母音で、グトブ = レモ = グタ祖語の母音体系は/i, i, e, a, ə, o, u/ or /i, i, e, a, ɔ, o, u/ (N. Zide 1965: 44)の7母音、または/i, y, e, eX, oX, o, uX, u/ (DeArmond 1976: 225)の8母音である。なお、このXは声門化音、またはささやき音をしめす。さらに、Zide & Zide (1987: 426)ではDeArmond (1976)が再構したXをhであらわし、この説を基本的に承認している。なお、中央ムンダ祖語の母音体系については筆者の手元にデータはない。さらに、ムンダ祖語についていえば、Zide (1965: 53)は南ムンダ祖語と同じ母音体系をたてている。その後、ザイデ教授の研究についていえば、具体的な母音音素は研究の進展とともに変化してきたが、南ムンダ祖語とムンダ祖語が同じ母音体系をもつという基本姿勢は変わっていない。

ところで、南ムンダ語派の母音体系について、共時的レベルにおいても、通時的レベルにおいても、そんなに多くの母音をたてる必要があるのかという疑問がわく。共時的記述において、ソーラー語には9母音がたてられている (Stampe 1963: 4)。これについて、Starosta (1964)が*i/e, u/o, ə/a, i/ə, e/i*の対立が自由変異であるケースを報告している。十分吟味に値する観察である。また、祖語における母音体系についても、異なった対応には異なった母音を機械的にたてる場合が多い。筆者がケルワリアン祖語で示したように、その対応語例の母音のあらわれる環境などを詳しくみていくと、再構する母音の数を減らすことができるはずである。こうしたことは筆者などが指摘するまでもない自明のことである。ただ、筆者がここでとくに指摘しておきたいのは、南ムンダ諸語やムンダ祖語にかんする比較言語学の研究論文のなかに、なまのデータが不足していることである。そのために、筆者自身、南ムンダ祖語の母音体系を実際のデータによって、検証することができない状況がある。Stampe (1965, 1966a, b, c)はシカゴ大学ムンダプロジェクトの最盛期におけるムンダ諸語の言語学的研究の進行状況を報告している。それによると、南ムンダ諸語にかんして、筆者がみたことのない数々の論文の要約が紹介されている。しかも、そのうちのいくつかの論文は *Forthcoming* と記されている。しかし近日刊行といいつつも、ついに刊行されなかったものも少なくない。南ムンダ祖語やムンダ祖語の祖形を問題とするためには、南ムンダ諸語の記述デ

ータの刊行が待たれる。

以上、母音についてみてきた。つぎに子音について述べてみよう。

子音については、母音ほどの問題点がない。N. Zide (1969) はつぎのように述べている。

“Munda consonantism is clear, and although there are some problems (e. g. accounting for retroflex consonants in Kherwarian and in Gata?) these are fairly minor, and one can reconstruct much of the Proto-Munda consonant system with a fair degree of certainty” (pp. 413-414)

そして、つぎのようなムンダ祖語の子音をたてている。

語頭子音/p, t, (c), k, b, d, j, g, s, m, (n), ɲ, l, r/

語末子音/b', d', j', g', m, n, ɲ, l, r/

筆者が専門とするケルワリアン諸語についてみると、ケルワリアン諸語に共通にみられる/h/がムンダ祖語にはみあたらない。N. Zide & Munda (1966) によると、ケルワリアン諸語の/h/は北ムンダ祖語の/*k/に由来する。それはコルク語とサンタル語やムンダ語との次の対応例から推察している。コ kasu, サ haso, ム hasu 'pain', コ kende, サ hende, ム hende 'black' など。ただし、こうした音韻変化を想定しなくてはならない子音対応例はあまりない。

ムンダ諸語の語末閉鎖音は無声と有声の対立がなく、破裂をともしない声門化音である。この現象はふるくは checked consonants と呼ばれた。言語学者もこの語末閉鎖音に注目し、多くの論文がある。たとえば、N. Zide (1958), Bhattacharya (1965), A. Zide (1978) など。うえであげたように、Zide (1969: 414) はこの声門化音/b', d', j', g'/をムンダ祖語にたてている。また、その後の研究で、ゴルム語に音韻対立がみられるささやき音に注目し、この声門化音とささやき音の対応関係から、祖語に喉頭化音か、ささやき音をたてるという説も提唱されている (Zide & Zide 1987)。この仮説を検証するためにはもう少しデータが必要である。

ムンダ祖語の子音にかんして、筆者がムンダ研究をはじめてからずっとひっかかることがある。それは反舌音と歯音について、ザイデ教授が無声歯音/t/と有声反舌音/d/の対立を考えていることである。無声/有声が弁別的なのか、調音点による歯音/反舌音の対立が弁別的なのか、よくわからない。こうした対立がはたして有効なのか、ザイデ教授に直接お聞きしたいところである。インドにおける反舌音の起源ともからんで、ムンダ祖語にはたして反舌音があったのかどうか、ひじょうにおおきな問題である。

この章ではムンダ比較音韻論の概略を述べた。これまでの研究によって、ムンダ祖語や南ムンダ祖語の音韻体系があきらかにされたかという疑問である。また、まだ証明が最終段階でないことを小論で示すためには、もう少し対応語例をあげて、議論しなければならない。

しかし、いまは紙幅に余裕がない。くわしくはまたの機会にゆずり、次章にうつりたい。

3. 比較形態・統語論、および語彙論

比較言語学において、系統関係を論証するさいにはどうしても音韻対応が優先される。それは十九世紀以来のインド・ヨーロッパ語族研究の成果にもとづく。とくに、「音法則に例外なし」を叫んで活躍した青年文法学派台頭以後は、音韻対応なしには系統関係を樹立できなくなってきた。しかし、一方で音韻対応だけにたよらずに、形態論や統語論までひろげて、類型論的特徴を考慮して、語族関係を見直そうとする動きがある。そうした例として、共通の接中辞を系統関係の決め手とするオーストリック語族が再び浮上してきたことはすでに「0. はじめに」で述べた。

しかしながら、形態論レベルや統語論レベルにおける類型論的特徴は系統関係を証明するために研究されることよりも、系統関係を越えて、ある地域の言語の特徴として論じられることが多い。とくに、インドは Emeneau (1956) 以後、「言語領域」(linguistic area)⁽¹¹⁾ にとらえられる。つまり、インドに分布する、系統の異なるインド・アーリア語族、ドラヴィダ語族、そしてムンダ語族に、語族を越えて共通の類型論的特徴がみられ、インドはこれらの語族が相互に影響しあう「言語領域」と考えられているのである。

ムンダ語族の形態論や統語論にかんする研究も、インドを対象とする地域言語学 (areal linguistics) の影響をおおきく受けている。まず、とりあげたいのはムンダ語族の指示詞体系である。ノーマン・ザイデはこの指示詞に、ずっと関心をいだいてきた (N. Zide 1972a, b, 1991)。とくに、Emeneau (1980b, 1983) によって指示詞がインド言語領域の一つの特徴と指摘されて以後は、それに呼応するかたちで研究をすすめてきた。その結果、ザイデはつぎのような結論に達した。南ムンダ語派のグトブ語の指示詞体系はドラヴィダ諸語からの借用である。北ムンダ語派の指示詞については、たぶんドラヴィダ起源であろう。しかし、借用はかなりふるい北ムンダ祖語の時代に起きた可能性が高い。以上が、ザイデの結論である。

ムンダ語族の類型論的特徴がインドの他の語族からの借用だと指摘された例として、この指示詞以外に複合動詞がある。Hook (1991) は南ムンダ語派からグトブ語、レモ語、グタ語の三言語と中央ムンダ諸語のカリア語、および北ムンダ諸語からサンタル語とムンダ語をとりあげて、それらの複合動詞について、隣接するインド・アーリア語族やドラヴィダ語族のそれと対比し、検討をくわえている。その結果、南ムンダ語派の三言語の複合動詞はインド・アーリア語族やドラヴィダ語族の複合動詞との類似が著しいことを指摘した。一方、サンタル語とムンダ語、およびカリア語については、インド言語地域の特徴とは異なる複合動詞がみられると、述べている。つまり、複合動詞にかんしていえば、中央ムンダ諸語を除く南ムンダ語派は隣接する諸言語から借用したが、北ムンダ語派は固有のものである、というのがフックの結論である。この複合動詞の研究とうえにあげた指示詞の研究をみると、北ムンダ語派のほうがよりムンダ祖語の体系に近く、南ムンダ語派のほうが隣接言語の影響を受けているということがいえる。ここで、すでにみた音韻論と比較すると、おもしろいことがいえる。これまでのシカゴ大学を中心とする研究成果にもとづくと、ムンダ祖語の音韻体系

を継承しているのは南ムンダ語派である。一方、ムンダ祖語の形態論的統語論的特徴については、むしろ北ムンダ語派がふりい体系を継承している。もちろん、こうした一般化をおこなうには比較音韻論の厳密なる検証とさらに多くの形態論的統語論的特徴による検証をおこなわなければならない。ただ、こうしたねじれ現象をここで指摘しておくことは、今後シカゴ大学のプロジェクトを総括するためにはそれなりの意味があると考えられる。

インド言語領域の共通特徴にかんする研究は初期の段階ではエメノーがおこなったように、音韻や語彙、そして形態論レベルでの議論が多かった (Emeneau 1980a 参照)。しかし近年は統語論レベルの議論に移ってきている。とくに Masica (1976) がとりあげた特徴 (たとえば、対格主語や複合動詞など) については多くの論文がある。そのすべての文献をとりあげて紹介するだけで、新たな論文ができる。しかし、いずれの論文もムンダ語族の記述はインド・アリア語族やドラヴィダ語族の記述にくらべすくない。また、共時的レベルでの類似を指摘するにとどめ、起源について言及する論文はあまりない。著者もチョターナーグプル地方に限定して、三語族に共通の特徴を述べたことがあるが、起源についてはふれてはいない (長田 1990, Osada 1991b)。

そうしたなかで、動詞の重複形をとりあげた Abbi (1992) はこの現象の起源をムンダ語族とみなしている。その大胆な結論自体には興味がわく。しかし、そこにあげられているムンダ語の例をみると、愕然とする。たぶん、ムンダ人がアッビのあげたムンダ語の例文を聞いてもムンダ語とはわからないだろう。それほどあげられたムンダ語の例が誤っているのである。この Abbi (1992) に対しては積極的に評価する書評もある (Hock 1993)。このことから感じることは、ムンダ語族の研究がインド言語領域の研究の高まりから、完全にとりのこされてしまったということである。とても残念である。

さいごに、語彙についてふれておく。最近、Kuiper (1991) が出版された。カイペルはずっとサンスクリット語の非印欧語要素の研究に取り組んできた (Kuiper 1948, 1955)。それに対し、Das (1995) が批判を展開している。それによると、カイペルがムンダやドラヴィダ起源とみなしている語彙は、本来であればヴェーダ語とドラヴィダ祖語やオーストロアジア祖語 (あるいはムンダ祖語) とが比定されるべきなのに、現代サンタル語だけと比定して、ムンダ起源とみるケースがあり、その方法論がいかにおかしいか指摘している。ダスの指摘は基本的に正しい。しかし一方では、カイペル自身の努力も評価したい、というのが正直な感想である。ただ、ドラヴィダ語語源辞典 (Burrow & Emeneau 1968, 1984) が出版されて以後、身元の不確かな語彙をムンダ起源とみる傾向があるように思う。こうしたことも、ムンダ諸語、とりわけ南ムンダ諸語の記述がしっかりとし、ムンダ語語源辞典が完成すればはつきりとする。

この章ではおもにムンダ語族の形態・統語論にかんする比較研究を、インド言語領域の研究との関連を中心に述べた。ムンダ語族の形態論や統語論をあつかった論文はきわめてすくない。音韻論にくらべると、形態論や統語論の記述には時間がかかる。記述研究がすくないぶん、どうしても比較形態・統語論研究が遅れがちである。インド言語地域研究の高まりとともに、インド言語領域を形成するムンダ語族の研究もさかんにならんことを願ってやまな

い。

4. オーストロアジア語族とムンダ諸語

オーストロアジア語族を比較言語学の立場から証明しようと試みたのは、ピノウの一連の研究であることはすでに述べた。しかし、小論ではピノウの一連の研究はとりあげない。ここでは、Donegan & Stampe (1983) と Donegan (1993a) をとりあげる。この二つの論文が、ピノウ以後、ムンダ語研究者によって試みられた唯一の研究成果である。この二つの論文は同じ趣旨で書かれ、重複する部分もかなり多い。後者の著者はドネガン一人であるが、大枠はスタンプと共通のものであると考えてよからう。

ムンダ諸語とモン・クメール諸語の系統関係が証明されにくい原因は、それぞれが異なった類型論の特徴をもつからである。ドネガン、スタンプはその相違点をつぎのようにまとめている (Donegan & Stampe 1983: 337, Donegan 1993a:2)。

	ムンダ	モン・クメール
句アクセント	下降(文頭)	上昇(文末)
語順	修飾—被修飾 (SOV, AN, 後置詞) 変わりやすい	被修飾—修飾 (SVO, NA, 前置詞) 固定
統語法	格、動詞と呼応	分析的
単語アクセント	強弱的、強弱弱的	弱強的、単音節的
形態法	こう着語的、接尾辞的、 抱合的	融合的、接頭辞的 または孤立語的
時間	モーラ規則的	アクセント規則的
音節	(C)V(C)	(C)V or (C)(C)V(G)(C)
子音体系	安定、長子音連続的	不安定、声調発生的 非長子音連続的
声調	高低アクセント (コルク語のみ)	声調あり
母音体系	安定、単母音的 母音調和	不安定、二重母音的 中舌母音化

この表に、若干の説明をくわえておこう。まず、句レベルでのアクセントはムンダでは文頭におかれて下降していくのに対し、モン・クメールでは上昇して文末におかれる。語順はムンダでは主語+目的語+動詞、形容詞+名詞、そして名詞+後置詞で、主語と目的語の位置は変わりやすい。一方、モン・クメールでは主語+動詞+目的語、名詞+形容詞、前置詞+名詞の語順で、主語と目的語の語順は固定されている。統語法についてはムンダは動詞と呼応と格で統語関係を示すが、モン・クメールでは語順によって統語関係を示す。単語

アクセントはムンダでは語頭におかれ、モン・クメールでは語頭にはおかれぬ。形態法では、ムンダはそれぞれ異なった文法範疇をもつ形態素が接尾辞的に付加されるが、モン・クメールでは一つの形態素が二つ以上の文法範疇をもつことがあり、おもに接頭辞をもつ。ムンダではモーラが時間的に規則正しく現われるのに対し、モン・クメールではアクセントが規則正しく現われる。音節はうゑの表の通りで、Cは子音、Vは母音、Gはわたり音を示す。子音体系はムンダでは安定し、長子音連続がみられるが、モン・クメールでは不安定で長子音連続はみられず、声調を発生させやすい子音体系をもつ。ムンダでは声調はなく、コルク語に高低アクセントによる対立がみられるだけであるが、モン・クメールでは声調がみられる。母音体系はムンダでは安定し、二重母音はあまりみられず、母音調和がみられる。一方、モン・クメールでは不安定で二重母音があり、中舌母音が発達している。

こうした違いは、そのままインドと東南アジアという異なった言語領域の特徴の違いを示す。したがって、この違いを言語領域の影響によって、ある程度説明できる。しかし、ドネガンらはそうした説明をとらない。では、どのような説明をおこなうのか。それはモーラが規則的に現われる言語とアクセントが規則的に現われる言語の相違から説明できる、と述べる。とくに、母音をとりあげて、モーラ規則言語では二重母音や中舌母音がみられない傾向にあり、逆にアクセント規則言語では二重母音や中舌母音が発達する傾向にあることを指摘する。そして、それぞれのケースにムンダ諸語とモン・クメール諸語をあてはめている。⁽¹³⁾

類型論的相違をなんとか克服して、ムンダ諸語とモン・クメール諸語の系統関係を証明しようとするドネガンらの試みは注目に値する。また、こうした方法論によって、オーストロアジア祖語の全体像にせまってくれるのではないかと期待している。しかし、その一方で、こうしたオーストロアジア語族を論じる前に、ムンダ語族について、まだまだやらなければならないことが多いように感じるのもまた事実である。ドネガンらの研究の行方を見守りたい。

5. おわりに

小論ではムンダ諸語の比較言語学研究の概観をこころみた。最初の予定では、対応語彙表を用意して、将来のムンダ語源辞典の原形のようなものを提示するつもりであった。しかし、紙数に限りがあり、これまでの研究の概要だけで終わってしまった。しかも、それとて十二分に紹介できたわけではない。しかしながら、ムンダ比較言語学研究はまだまだ発展途上である、ということだけは理解できたのではなかろうか。小論をステップに、これからのムンダ諸語の比較言語学研究にとりくみたいと思う。

注

- (1) 『言語学大辞典』には三上直光氏による「ムンダー諸語」の記述がある。氏は自身のフィールドでないにもかかわらず、丁寧に文献を読んで記述しており、十分に信頼しうる。
- (2) かつて、ムンダ諸語の研究に従事した言語学者として、文法理論 Lexicase の提唱者であ

るスタロスタ、自然音韻論 (Natural Phonology) の提唱者スタンプ、そして『英語変形文法の要点』(今井邦彦訳 大修館書店 1972年) の邦訳があるランゲンドンなど、そうそうたるメンバーである。この人たちがムンダ諸語の研究を続けられなかったのは、アメリカの言語学界では理論を重視し、個別言語研究があまり評価されない、という背景があるのではないかとともに残念である。

- (3) このことはコーネル大学のディフロース教授から直接お聞きした。
- (4) かれらの支持する根拠は、オーストロアジア語族とオーストロネシア語族に共通の接中辞がみられることである。音韻対応については、Diffloth (1990, 1994) があるが、十分証明できる段階ではないというのがディフロース教授の結論である。
- (5) たとえば、590の話者人口しか報告されていないビルホル語の分布をみると、西ベンガル州からオリッサ州にまで広がっているし、また、カリア語の分布をみると、マディヤブラデシュ州のコルク語地域の南にまで広がっていることになる。何をもとにプロットしたのか、聞いてみたいところである。
- (6) 校正の段階で、Durie & Pejros (1993) による書評を知った。彼らも Parker (1991) が問題の多い紹介であることを指摘している。
- (7) 厳密に言えば、N. Zide (1969) ではアスル語、ビルホル語、プミジュ語、トゥリ語が入っていない。
- (8) そのほかに、Ray (1976) や Mitra (1988, 1991) などがあるが、言語学的記述の信頼性への疑問が残る。また、Macphail (1983) や Muscat (1989) などのサンタル語を学ぶための教本やベナガリア教会が出版するテキスト類もある。これらは言語学的研究ではないが、サンタル語がどんな言語であるかを知るためには利用できる。なお、英語以外にも、ベンガル語、オリヤー語、ヒンディー語による教本やサンタル人が独自に使うオル・チキ文字によるテキストがあるが、ここでは扱わない。
- (9) ザイド教授からの私信によると、現在ムンダ諸語の動詞についての論文をまとめているとのこと。その発表が待たれる。
- (10) 筆者がメルボルン大学のベイロス博士と共同でおこなった語彙統計論による分類によれば、グトブ語-レモ語グループはソーラー語-ゴルム語グループよりも、カリア語-ジュアン語に近いという結果がでた。まだ草稿の段階であるが、いずれは発表する予定である。
- (11) 長田 (1990) では linguistic area を「言語地域」と訳したが、『言語学大辞典』にしたがって、今後は「言語領域」と訳語を統一する。
- (12) この本以外に、Abbi (1994) でもムンダ語の記述はおかしい。アッビはインド言語領域論の論客として、10近い論文を発表しているが、どの論文においてもムンダ語の例には問題がある。いずれ、筆者はこの誤りを英文論文で指摘する予定である。
- (13) ドネガンはムンダとモン・クメールの音韻対応だけを問題としていない。もっと一般的な音韻変化の法則に基づいて、これらの音韻対応を考察している。一般的な音韻変化についてのドネガンの考えを知るには Donegan (1993b) がある。

参考文献

Abbi, Anvita (1992) *Reduplication in South Asian Languages: An Areal, Typological,*

- and *Historical Study*. Allied Publishers, New Delhi.
- Abbi, Anvita (1994) *Semantic Universals in Indian Languages*. Indian Institute of Advanced Study, Shimla.
- Aze, F. Richard (1973) "Clause patterns in Parengi-Gorum", R. L. Trail (ed) *Patterns in clause, sentence, and discourse in selected languages of India and Nepal*. Summer Institute of Linguistics, Kathmandu. Part 1: 235-312.
- Aze, F. Richard and Trish Aze (1973) "Parengi texts", R. L. Trail (ed) *Patterns in clause, sentence, and discourse in selected languages of India and Nepal*. Summer Institute of Linguistics, Kathmandu.
- Bahl, K. C. (1962) *Korwa Lexicon*. Mimeographed. Chicago.
- Bauer, Christian (1993) "Review of 'A Guide to Austroasiatic Speakers and Their Languages' by Parker", *Bulletin of the School of Oriental and Asian Studies* 56(1) : 193-194.
- Bhattacharya, Sudhibhushan (1954) "Studies in the Parengi Language", *Indian Linguistics* 14(3) : 45-63.
- Bhattacharya, Sudhibhushan (1965) "Glottal stop and checked consonants in Bonda", *Indo-Iranian Journal* 9: 69-77.
- Bhattacharya, Sudhibhushan (1966) "Some Munda etymologies", Norman Zide (ed). 28-40.
- Bhattacharya, Sudhibhushan (1968a) *A Bonda Dictionary*. Deccan College, Poona.
- Bhattacharya, Sudhibhushan (1968b) "Some more Munda etymologies", Heesterman (ed). 362-370.
- Bhattacharya, Sudhibhushan (1975a) *Studies in Comparative Munda Linguistics*. Indian Institute of Advanced Study, Simla.
- Bhattacharya, Sudhibhushan (1975b) "Munda studies: a new classification of Munda", *Indo-Iranian Journal* 17: 97-101.
- Bhattacharya, Sudhibhushan (1976) "Gender in Munda", P. N. Jenner, L. C. Thompson and S. Starosta (eds) 189-211.
- Biligiri, H. S. (1965a) *Kharia : Phonology, Grammar and Vocabulary*. Deccan College, Poona.
- Biligiri, H. S. (1965b) "The Sora verb: a restricted study", *Lingua* 14: 231-250.
- Bright, William (ed) (1992) *International Encyclopedia of Linguistics*. 4 Volumes. Oxford University Press.
- Bodding, P. O. (1925-40) *Santal Folk Tales*. 3 Volumes. Instituttet for Sammenlignende Kulturforskning, Oslo.
- Bodding, P. O. (1929-30) *Materials for a Santali Grammar*. 2 Volumes. The Santal Mission of the Northern Church, Dumka.
- Bodding, P. O. (1929-36) *A Santali Dictionary*. 5 Volumes. Det Norske Videnskaps Akademi, Oslo.

- Bosu-Mullick, S. (ed) (1991) *Cultural Chotanagpur : Unity in Diversity*. Uppal Publishing House, Delhi.
- Burrow, Thomas. and M. B. Emeneau (1968) *A Dravidian Etymological Dictionary*. Oxford University Press. Second Edition in 1984.
- Cardona, G. and Norman H. Zide (ed) (1987) *Festschrift for Henry Hoenigswald : On the Occasion of his Seventieth Birthday*. Gunter Narr Verlag, Tübingen.
- Cook, W. A. (1965) *A Descriptive Analysis of Mundari : A Study of the Structure of the Mundari Language According to the Methods of Linguistic Science*. Ph. D. Dissertation. Georgetown University.
- DeArmond, Richard C. (1976) "Proto-Gutob-Remo-Gtaq stressed monosyllabic vowels and initial consonants", P. Jenner, L. C. Thompson and S. Starosta (eds) 213-227.
- Das, Rahul Peter (1995) "The hunt for foreign words in the Rgveda", *Indo-Iranian Journal* 38(3) : 207-238.
- Dasgupta, Dipankar (1978) *Linguistic Studies in Juang, Kharia Thar, Lodha, Mal-Pahariya, Ghatoali, Pahariya*. Anthropological Survey of India, Calcutta.
- Deeney, John (1975) *Ho Grammar and Vocabulary*. Xavier Ho Publications, Chaibasa.
- Deeney, John (1978a) *Ho-English Dictionary*. Xavier Ho Publications, Chaibasa.
- Diffloth, Gérard (1990) "What happened to Austric?", *Mon-Khmer Studies* 16-17 : 1-9.
- Diffloth, Gérard (1994) "The lexical evidence for Austric, so far", *Oceanic Linguistics* 33(2) : 309-322.
- Diffloth, Gérard and Norman H. Zide (1992) "Austro-asiatic languages", Bright (ed) 1 : 137-142.
- Donegan, Patricia (1993a) "Rhythm and vocalic drift in Munda and Mon-Khmer", *Linguistics of the Tibet-Burma Area* 16(1) : 1-43.
- Donegan, Patricia (1993b) "On the phonetic basis of phonological change", Charles Jones (ed). 98-130.
- Donegan, Patricia and David Stampe (1983) "Rhythm and holistic organization of language structure", J. Richardson, M. Marks and A. Chukerman (eds) 337-353.
- Durie, Mark and Iliya Pejros (1993) "Review of 'A Guide to Austroasiatic Speakers and Their Languages' by Parker", *Journal of the Australian Universities Languages and Literature Association* 79 : 114-117.
- Emeneau, M. B. (1956) "India as a linguistic area", Emeneau (1980a) 105-125.
- Emeneau, M. B. (1980a) *Language and Linguistic Area*. Stanford University Press.
- Emeneau, M. B. (1980b) "Demonstrative pronominal bases : a revision", *Proceedings of the Sixth Annual Meeting of Berkeley Linguistic Society* 20-27.
- Emeneau, M. B. (1983) "Demonstrative pronominal bases in the Indian linguistic area", *International Journal of Dravidian Linguistics* 12(1) : 1-7.
- Fernandez, Frank (1968) *A Grammatical Sketch of Remo*. Ph. D. Dissertation. Univer-

sity of North Caroline.

- Fernandez, Frank (1983) "The morphology of the Remo (Bonda) verbs", *International Journal of Dravidian Linguistics* 12(1) : 15-45.
- Ghosh, Arun (1994) *Santali, A Look into Santal Morphology*. Gyan Publishing House, New Delhi.
- Girard, Beryl (No Date) *Korku-Hindi-English Dictionary*. Central India Baptist Mission, Ramkhera (India).
- Gumperz, John in collaboration with H. S. Biligiri (1957) "Notes on the phonology of Mundari", *Indian Linguistics* 17 : 6-15.
- Hahn, Ferdinand (1900) "A primer of the Asur dukmā, a dialect of the Kolarian language", *Journal of Asiatic Society of Bengal* 69(1) : 149-172.
- Heesterman, J. C. (ed) *Pratidānam : Indian, Iranian and Indo-European Studies Present to Franciscus Bernardus Kuiper on His Sixtieth Birthday*. Mouton, The Hague.
- Hock, H. H. (1993) "Review of Abbi (1992)", *Studies in the Linguistic Science* 23(1) : 169-191.
- Hoffmann, John (1903) *Mundari Grammar*. Bengal Secretariat Press, Calcutta.
- Hoffmann, John (1929-78) *Encyclopaedia Mundarica*. 16 Volumes. Reprinted in 1990. Gian Publishing House, Delhi.
- Hook, Peter Edwin (1991) "The compound verb in Munda : an areal and typological overview", *Language Sciences* 13(2) : 181-195.
- Jenner, Philip N. Lawrence C. Thompson and Stanley Starosta (eds) (1976) *Austroasiatic Studies*. Part I and II. University of Hawaii Press.
- Jones, Charles (ed) (1993) *Historical Linguistics : Problems and Perspectives*. Longman, London.
- Kuiper, F. B. J. (1948) *Proto-Munda Words in Sanskrit*. Verhandelinger der koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen, Letterkunde Nieuwe Reeks Deel 51(3). Amsterdam.
- Kuiper, F. B. J. (1955) "Rigvedic loanwords", Otto Spies (ed) 137-185.
- Kuiper, F. B. J. (1991) *Aryans in the Rigveda*. Editions Rodopi, Amsterdam.
- Kuiper, F. B. J. (1995) "On a hunt for 'possible' objections", *Indo-Iranian Journal* 38(3) : 289-247.
- Lakshmi Bai, B. and B. Ramakrishna Reddy (eds) (1991) *Studies in Dravidian and General Linguistics : A Festschrift for Bh. Krishnamurti*. Osmania University, Hyderabad.
- Langendoen, Terrence D. (1967a) "The copula in Mundari", J. W. M. Verhaar (ed). 75-100.
- Langendoen, Terrence D. (1967b) "Mundari verb conjugation", *Linguistics* 32 : 39-57.
- Macphail, R. M. (1983) *An Introduction to Santali*. Reprint Edition Firma KLM,

- Calcutta.
- Mahapatra, B. P. (1976) "Comparative notes on Juang and Kharia finite verbs", P. N. Jenner, L. C. Thompson and S. Starosta (eds) 815-831.
- Mahapatra, B. P. (1980) "Munda languages", *Bulletin of the Department of Comparative Philology and Linguistics*, Calcutta University. 4: 22-42.
- Malhotra, Veena (1982) *The Structure of Kharia: A Study of Linguistic Typology and Language Change*. Ph. D. Dissertation. Jawaharlal Nehru University, New Delhi.
- Masica, Colin (1976) *Defining a Linguistic Area: South Asia*. University of Chicago Press.
- Matson, D. M. (1964) *A Grammatical Sketch of Juang*. Ph. D. Dissertation. University of Wisconsin.
- 三上 直光 (1992) 「ムンダー諸語」、『言語学大辞典』4: 388-391.
- Minegishi Makoto (1990) "Santali-English-Japanese wordlist —a preliminary report —", *Journal of Asian and African Studies* 39: 69-84.
- Mitra, Parimal Chandra (1988) *Santhali: The Base of World Languages*. Firma KLM, Calcutta.
- Mitra, Parimal Chandra (1991) *Santhali: A Universal Heritage*. Firma KLM, Calcutta.
- Munda, Ram Dayal (1968) *Proto-Kherwarian Phonemic System*. Unpublished M. A. thesis. Chicago University.
- Munda, Ram Dayal (1969) "Aspects of Mundari verb", *Indian Linguistics* 30: 27-49.
- Muscat, George (1989) *Santali: A New Approach*, Santali Book Depot, Sahibganj.
- Nagaraja, K. S. (1985) "Korku Phonology", *Bulletin of the Deccan College Research Institute* 44: 113-119.
- Nagaraja, K. S. (1989) *Austroasiatic Languages: A Linguistic Bibliography*. Deccan College, Poona.
- Nagaraja, K. S. (1991-92) "Interrogation and indefiniteness in Korku", *Bulletin of the Deccan College Post-Graduate & Research Institute* 51 & 52: 347-352.
- Nagaraja, K. S. (1993) "Korku and Indo-Aryan: a case of convergence", *Pondicherry Institute of Linguistics and Culture Journal of Dravidian Studies*. 3(2): 169-175.
- 長田 俊樹 (1984) 「Proto-Kherwarian の母音体系」、『言語研究』86: 192-193.
- 長田 俊樹 (1990) 「インド東部チョターナーグプル地方における言語輻合について」『内陸アジア言語の研究』6: 143-177。
- Osada Toshiki (1991a) "Father Ponette's field notes on Turi with a comparative vocabulary", *Journal of Asian and African Studies* 42: 175-189.
- Osada Toshiki (1991b) "Notes on linguistic convergences in the Chotanagpur area", S. Bosu-Mullick (ed) 99-119.
- Osada Toshiki (1992) *A Reference Grammar of Mundari*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.
- Osada Toshiki (1993) "Field notes on Birhor", *Annual Reports on CIIL-ILCAA Joint*

- Osada Toshiki (1996) "Notes on the Proto-Kherwarian vowel system", *Indo-Iranian Journal* 39 : 245-258.
- Panda, Pramoda Kumari (1989) *Didayi*. Academy of Tribal Dialects and Culture, Bhubaneswar.
- Parkin, Robert (1991) *A Guide to Austroasiatic Speakers and Their Languages*. University of Hawaii Press, Honolulu.
- Parkin, Robert (1992) *The Munda of Central India : An Account of Their Social Organization*. Oxford University Press, Delhi.
- Pinnow, Heinz-Jürgen (1959) *Versuch einer historischen Lautlehre der Kharia-Sprache*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Pinnow, Heinz-Jürgen (1960) "Über den Ursprung der voneinander abweichenden Strukturen der Munda- und Khmer-Nikober-Sprachen" *Indo-Iranian Journal* 4 : 81-103.
- Pinnow, Heinz-Jürgen (1963) "The position of the Munda languages within the Austroasiatic family", H. L. Shorto (ed) 140-152.
- Pinnow, Heinz-Jürgen (1965a) *Kharia-Texte Prose und Poesie*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Pinnow, Heinz-Jürgen (1965b) "Personal pronouns in the Austroasiatic languages : a historical study", *Lingua* 14 : 3-42.
- Pinnow, Heinz-Jürgen (1966) "A comparative study of the verb in the Munda languages", Norman Zide (ed) 96-193.
- Ramamurti, G. V. (1931) *A Manual of the So:ra:(Savara) Language*. Government Press, Madras.
- Ramamurti, G. V. (1933) *English-Sora Dictionary*. Government Press, Madras.
- Ramamurti, G. V. (1938) *Sora-English Dictionary*. Government Press, Madras.
- Ramaswami, N. (1992) *Bhumij Grammar*. Central Institute of Indian Languages, Mysore.
- Ray, Pranabesh Sinha (1976) "Linguistic sketch of a Santali idiolect", *Bulletin of the Department of Comparative Philology and Linguistics* 1 : 1-66.
- Reid, Lawrence (1994) "Morphological evidence for Austric", *Oceanic Linguistics* 33 (2) : 323-344.
- Reid, Lawrence (1996) "The current state of linguistic research on the relatedness of the language families of East and Southeast Asia", *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 15 : 87-91.
- Richardson, J., M. Marks and A. Chukerman (eds) (1983) *Paper from the Parasession on the Interplay of Phonology, Morphology and Syntax*. Chicago Linguistic Society.
- Roy, S. C. (1925) *The Bihors*. Reprinted in 1978. Man in India Office, Ranchi.
- Schmidt, P. W. (1906) "Die Mon-Khmer-Völker, ein Bindeglied zwischen Völkern

- Zentralasiens und Austronesiens" *Archiv für Anthropologie* 33 : 59-109.
- Sebeok, Thomas (1942) "An examination of the Austroasiatic language family", *Language* 18(3) : 206-217.
- Sebeok, Thomas (1943) "Phonemic system of Santali", *Journal of American Oriental Society* 63 : 66-67.
- Sebeok, Thomas (ed) (1968) *Current Trends in Linguistics*. Mouton, The Hague.
- Shorto, H. L. (ed) (1963) *Linguistic Comparison in South East Asia and Pacific*. School of Oriental and African Studies, London.
- Spies, Otto (ed) (1955) *Studia Indologica : Festschrift für Willibald Kirfel zur Vollendung Seines 70 Lebensjahres*. Bonner Orientalistische Studien, Neue Serie 3.
- Stampe, David (1963) *Proto-Sora-Parengi Phonology*. Unpublished M. A. thesis. Chicago University.
- Stampe, David (1965) "Recent work in Munda linguistics I" *International Journal of American Linguistics* 31(4) : 332-341.
- Stampe, David (1966a) "Recent work in Munda linguistics II" *International Journal of American Linguistics* 32(1) 74-88.
- Stampe, David (1966b) "Recent work in Munda linguistics III" *International Journal of American Linguistics* 32(2) : 164-168.
- Stampe, David (1966c) "Recent work in Munda linguistics IV" *International Journal of American Linguistics* 32(4) : 390-397.
- Starosta, S. (1964) "Some observations on vowel distribution in Sora", abstract 685 in Stampe (1965).
- Starosta, S. (1967) *Sora Syntax : A Generative Approach to a Munda Language*. Ph. D. Dissertation. University of Wisconsin.
- Starosta, S. (1971) "Derivation and case in Sora verbs", *Indian Linguistics* 32(3) : 194-206.
- Starosta, S. (1976) "Case forms and case relations in Sora", P. N. Jenner, L. C. Thompson and S. Starosta (eds) 1069-1107.
- Starosta, S. (1981) "Sora noun inflection", *Working Papers in Linguistics* University of Hawaii, Manoa.
- Suryakumari (1991) *A Descriptive Study of Santali*. Ph. D. Dissertation. Central Institute of Indian Languages, Mysore.
- Thomas, J. M. C. and L. Bernot. (eds) (1972) *Langues et Techniques : Nature et Société*. Éditions Klincksieck, Paris.
- Tryon, Darrell T. (ed) (1995) *Comparative Austronesian Dictionary*. 4 Vols. Mouton de Gruyter, Berlin.
- 土田 滋 (1989) 「語族再考—オーストロネシア語族の場合」、『三省堂ぶっくれっと』80 : 112-119.
- Zide, Arlene R. K. (1963) "Parengi Phonology" unpublished M. A. thesis. University of

- Pennsylvania. abstract 687 in Stampe (1965).
- Zide, Arlene R. K. (1972) "Transitive and causative in Gorum", *Journal of Linguistics* 8 : 201-215.
- Zide, Arlene R. K. (1976) "Nominal combining forms in Sora and Gorum", P. Jenner, L. Thompson and S. Starosta (eds) 1251-1294.
- Zide, Arlene R. K. (1978) "A note on glottalization and release in Munda", *Indian Linguistics* 39 : 70-75.
- Zide, Arlene R. K. (1982) *A Reconstruction of Proto-Sora-Juray-Gorum Phonology*. Ph. D. Dissertation. University of Chicago.
- Zide, Arlene R. K. (1983) "The story of two girls (excerpt from a Juray Text)", *International Journal of Dravidian Linguistics* 12(1) : 109-125.
- Zide, Arlene R. K., David Magier and Eric Schiller (eds) (1985) *Proceedings of the Conference on Participant Roles : South Asia and Adjacent Areas*. Indiana University Linguistic Club, Bloomington.
- Zide, Norman H. (1958) "Final stops in Korku and Santali", *Indian Linguistics* 19 : 44-48.
- Zide, Norman H. (1960) *Korku Phonology and Morphophonemic*. Ph. D. Dissertation, University of Pennsylvania.
- Zide, Norman H. (1965) "Gutob-Remo vocalism and glottalised vowels in Proto-Munda" *Lingua* 14 : 43-53.
- Zide, Norman H. (1966) "Korku low tone and the Proto-Kherwarian vowel system", Norman Zide (ed) 214-229.
- Zide, Norman H. (1968) "Graphemic system in the ol cemed script", *Papers from the 4th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. Chicago University Press. 238-254.
- Zide, Norman H. (1969) "Munda and Non-Munda Austroasiatic languages", T. Sebeok (ed) 5 : 411-430.
- Zide, Norman H. (1972a) "A Munda demonstrative system : Santali", J. M. C. Thomas and L. Bernot (eds) 267-274.
- Zide, Norman H. (1972b) "Review of Bhattacharya (1968a)", *Journal of the American Oriental Society* 92(4) : 506-513.
- Zide, Norman H. (1978) *Studies in the Munda Numerals*. Central Institute of Indian Languages, Mysore.
- Zide, Norman H. (1979) "Korku syllables and syllable stress", *Pacific Linguistics* C-45 : 161-186.
- Zide, Norman H. (1985) "Notes mostly historical on some participant role in some Munda languages", Arlene R. K. Zide et al. (eds) 92-103.
- Zide, Norman H. (1991) "Possible Dravidian sources of some Munda demonstrative bases", Lakshmi Bai and B. Ramakrishna Reddy (eds) 349-364.

- Zide, Norman H. (ed) (1966) *Studies in Comparative Austroasiatic Linguistics*. Mouton, The Hague.
- Zide, Norman H. and K. Mahapatra (1972) "Gta? nominal combining forms", *Indian Linguistics* 33(3) : 179-202.
- Zide, Norman H. and R. D. Munda (1966) "The Kherwarian k > h shift", abstract 776. in Stampe (1966c)
- Zide, Norman H. and David Stampe (1968) "The place of Kharia-Juang in the Munda family", Krishnamurti (ed) 370-377.
- Zide, Norman H. and Arlene R. K. Zide (1973) "Semantic reconstructions in Proto-Munda cultural vocabulary 1", *Indian Linguistics* 34(1) : 1-24.
- Zide, Norman H. and Arlene R. K. Zide (1976) "Proto-Munda cultural vocabulary : evidence for early agriculture", P. N. Jenner, L. C. Thompson and S. Starosta (eds) 1295-1334.
- Zide, Norman H. and Arlene R. K. Zide (1987) "A KM laryngeal as a conditioning factor for s-loss in Sora-Juray-Gorum", G. Cardona and Norman Zide (eds) 417-431.